

# 牛頸平田窯跡

— D 地点 —

福岡県大野城市大字牛頸字平田所在窯跡調査報告

大野城市文化財調査報告書

第 5 集

1 9 8 0

大野城市教育委員会

## 序

大野城市教育委員会は、昭和54年度に本市仲島地区と牛頸地区で埋蔵文化財発掘調査を実施いたしました。

とくに牛頸地区は、日本有数の須恵器窯跡密集地帯として著名であります。本年度も牛頸中通遺跡の3次にわたる古墳群・窯跡群発掘調査と、この平田D-1窯跡発掘調査を行なったわけです。

平田D-1窯跡発掘調査は、ヤマエ久野株式会社の宅地開発に伴い調査いたしましたが、その結果多数の貴重な資料が出土し、考古学的にも未知の分野の解明に大きな貢献をなすものと期待されております。

この報告書が単なる調査の記録にとどまらず、日本古代史とりわけ牛頸窯跡群の研究と、歴史や文化財に対する市民の理解と認識の一助となりますよう、切に希望いたします。

最後に、調査補助員、発掘作業員、整理作業員の皆さん、および福岡県文化課、九州歴史資料館など関係の方々に対し、心から感謝の意を表します。

昭和55年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 井上 幸一郎

## 例 言

1. この報告書は昭和54年12月20日から翌年1月28日にかけて実施した、福岡県大野城市大字牛頸字平田所在窯跡の調査報告書である。
2. 発掘調査及び遺物整理作業はヤマエ久野株式会社の受託事業として大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の実施に当たり、ヤマエ久野株式会社、丸三興業の援助を受けた。
4. 発掘調査並びに報告書作製に当たっては、副島邦弘氏をはじめとする県文化課技師諸氏、同じく岩瀬正信氏に大変お世話になった。また県文化財管理委員前田軍治氏には調査のご指導をお願いした。合わせて感謝の意を表したい。
5. 本書掲載図のトレースは平田倫子氏のご協力を得た。
6. 遺物実測は舟山良一、大谷龍代が、遺物写真は岡紀久夫が担当した。
7. 牛頸古窯跡群分布図は前田軍治氏作製によるものである。
8. 本書の執筆は | を後藤秀規が、その他並びに編集を舟山が担当した。
9. 本書に掲載した地形図には建設省国土地理院発行の2.5万分の1『福岡南部』・『不入道』を使用した。

# 本文目次

I はじめに .....	1
II 位置と環境 .....	1
III 調査の結果 .....	2
(1) 窯 跡 .....	2
(2) 遺 物 .....	5
IV ま と め .....	12

## 図 版 目 次

- (1)平田D-1窯調査前  
(2)同上調査後(気球写真)
- (1)平田D-1窯最終床面と灰原  
(2)同上全景
- (1)平田D-1窯最終床面  
(2)同上
- (1)平田D-1窯床面断面  
(2)同上灰原
- (1)平田D-1窯全景  
(2)同上  
(3)同上
- (1)平田D-1窯生焼け土器出土状態  
(2)同上蓋除去後
- (1)平田D-1窯生焼け土器出土状態  
(2)同上窯内土器出土状態
- 平田D-1窯出土遺物①
- 平田D-1窯出土遺物②
- 平田D-1窯生焼け土器①
- 平田D-1窯生焼け土器②
- 平田D-1窯生焼け土器③
- 平田D-1窯生焼け土器ヘラ記号①

- 平田D-1窯生焼け土器ヘラ記号②
- 平田D-1窯生焼け土器ヘラ記号③  
平田D-1窯出土須恵器ヘラ記号①
- 平田D-1窯出土須恵器ヘラ記号②

## 挿 図 目 次

- 牛頸古窯跡群分布図
- 平田D-1窯周辺地形図(1/1,000)
- 平田D-1窯地形図(1/100)
- 平田D-1窯実測図(1/100)
- 平田D-1窯生焼け土器出土状態実測図  
(1/10)
- 平田D-1窯出土遺物実測図(1/3)
- 平田D-1窯生焼け土器実測図①  
(1/3)
- 平田D-1窯生焼け土器実測図②  
(1/3)
- 平田D-1窯生焼け土器ヘラ記号拓影  
(1/3)



# I はじめに

大野城市大字牛頸1,087-1所在平田D-1窯跡は、昭和48年3月31日福岡県文化課作成の大野城市遺跡分布図に平田2号窯跡として周知されていた遺跡である。

この平田D-1窯跡発掘調査は、ヤマエ久野株式会社による宅地造成計画に起因し、大野城市教育委員会が受託事業として実施したものである。

今回の調査に着手する以前から、当遺跡周辺は土取り工事によって削平され、当遺跡も窯本体の上半分は削り取られて消失し、本体下半分と灰原が残存し、本体天井部分が露出して、崖面にポツカリと洞穴状を呈していたのであり、付近を通る県道板付・牛頸・筑紫野線からも遺跡の現状を確認することが可能であった。

昭和54年6月14日、ヤマエ久野株式会社から提出された、大野城市大字牛頸1,087-1ほかの開発計画事前審査会が大野城市役所関係各課と同社出席のもとにひらかれた。その会議の結果、文化財保護については、開発工事着手前に開発予定地内の遺跡確認調査を行い、引き続き発掘調査が必要であるとの結論に達した。

遺跡確認調査の結果、崖面に露出している平田D-1窯跡の他に遺跡は発見されなかった。その後、大野城市教育委員会と同社との間に数度の交渉がもたれ、昭和54年12月20日、両者の間に発掘調査委託契約が締結され、即日発掘調査に着手した。この窯跡は灰原が予想外に大きく、出土品の数量も多かったため調査は当初の予定期間を超え、55年1月28日まで実施した。

最後に、発掘作業員、整理作業員の方々や、いろいろと御協力いただいた下川氏や今富氏に対し厚く感謝したい。

調査関係者は下記のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	井上 幸一郎
同	教育部長	古賀 昭三
同	社会教育課長	井原 信一
同	社会教育係長	赤星 健彦
同	社会教育係文化財担当	後藤 秀規
同	埋蔵文化財発掘調査技師	舟山 良一
補助員		高田 一弘

# II 位置と環境

本窯跡は福岡県大野城市大字牛頸字平田に所在し、一般に牛頸窯跡群と言われる須恵器窯跡

群の1つである。牛頸窯跡群は東は太宰府町、西は春日市の一部を含み、東西4 Km、南北5 Kmの範囲に存在し、その数は300とも500とも言われ、古代における大窯業地帯である。現在の知見では6世紀中頃(ⅢA期)から8世紀後半(Ⅶ期)まで約300年間にわたって操業されたと考えられている(註)。

牛頸は牛頸川・平野川流域の狭長な平地と、低い丘陵が複雑に入り込んだ地形をなし、須恵器窯を築くには適した地域である。有名な須玖岡本遺跡とは4 Kmしか離れていないが、本格的な弥生時代の遺跡は知られていない。

註：本窯跡群の研究史その他については、副島邦弘編『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会1980を参照されたい。

### Ⅲ 調査の結果

#### 1. 窯跡

平田D-1窯は牛頸川の右岸やや奥まった小支谷に面する低丘陵の西斜面に位置する。現在は用水路となっている。土取りによって窯上方が削りとられており、その状況並びに試掘により、残存部は少ないことが予想されたのであるが、調査の結果、窯はほぼ3分の2を残し、灰原もかなり大きなものであった。

標高約55m付近に焚口を構え、主軸をN-82°-Eに持つ。現存長約12mを測る。

#### 前庭部(第4図 X'-Y間)

壁面・床面ともに柔かく、直接火を受けた形跡はない。平面的にはYからXまでと考えられるが、傾斜変換点にあたるX'までとしてよいであろう。X'-Y間は約2.1m、最大幅4.1mである。

#### 燃焼部(第4図 Y-Z間)

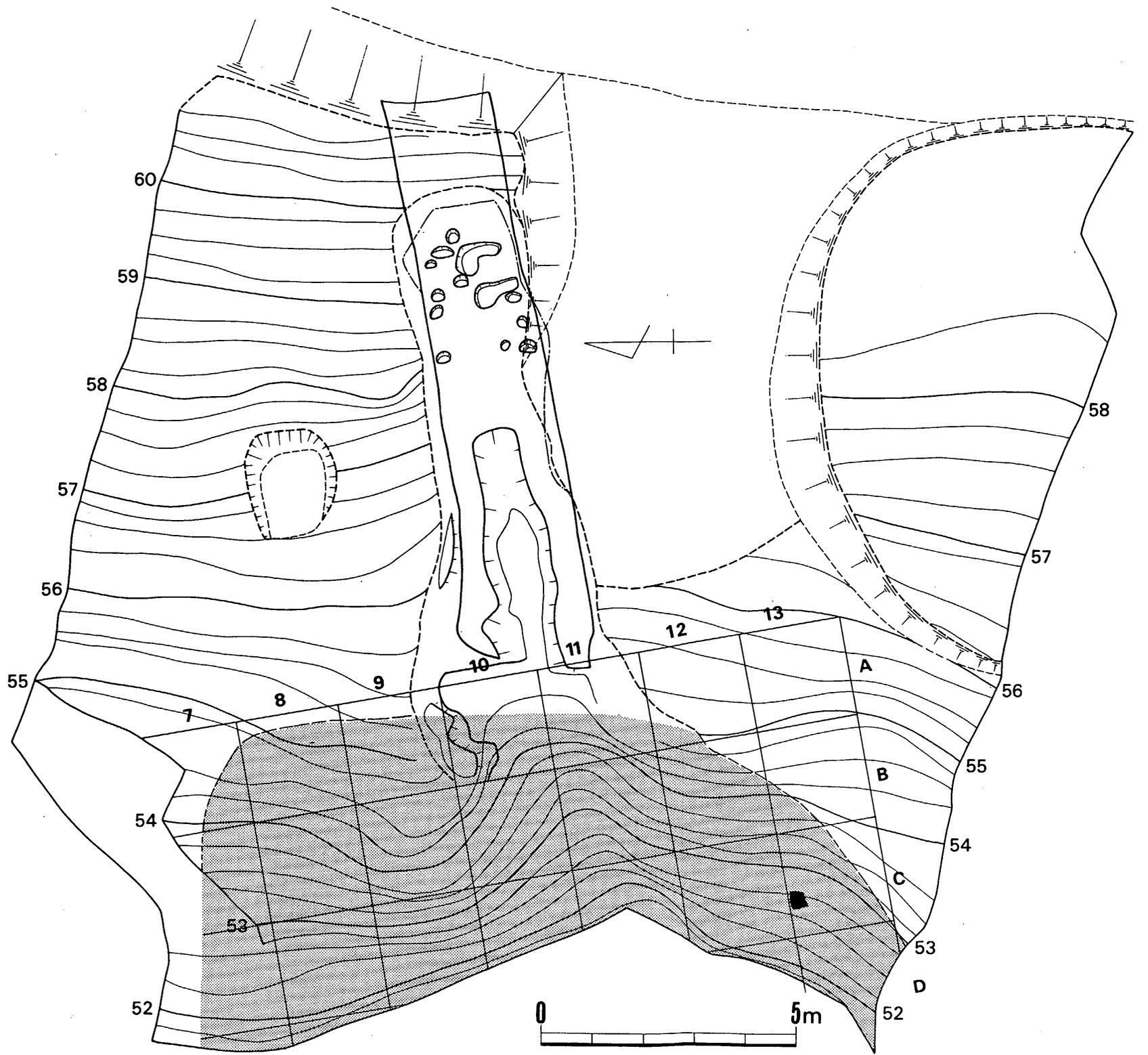
側壁が垂直にたってよく焼けているYから、壁面が中心に向かってせり出し、傾斜変換点に近いZまでと考えられる。その長さ約2.5m、Zでの幅約2.2mである。

#### 焼成部

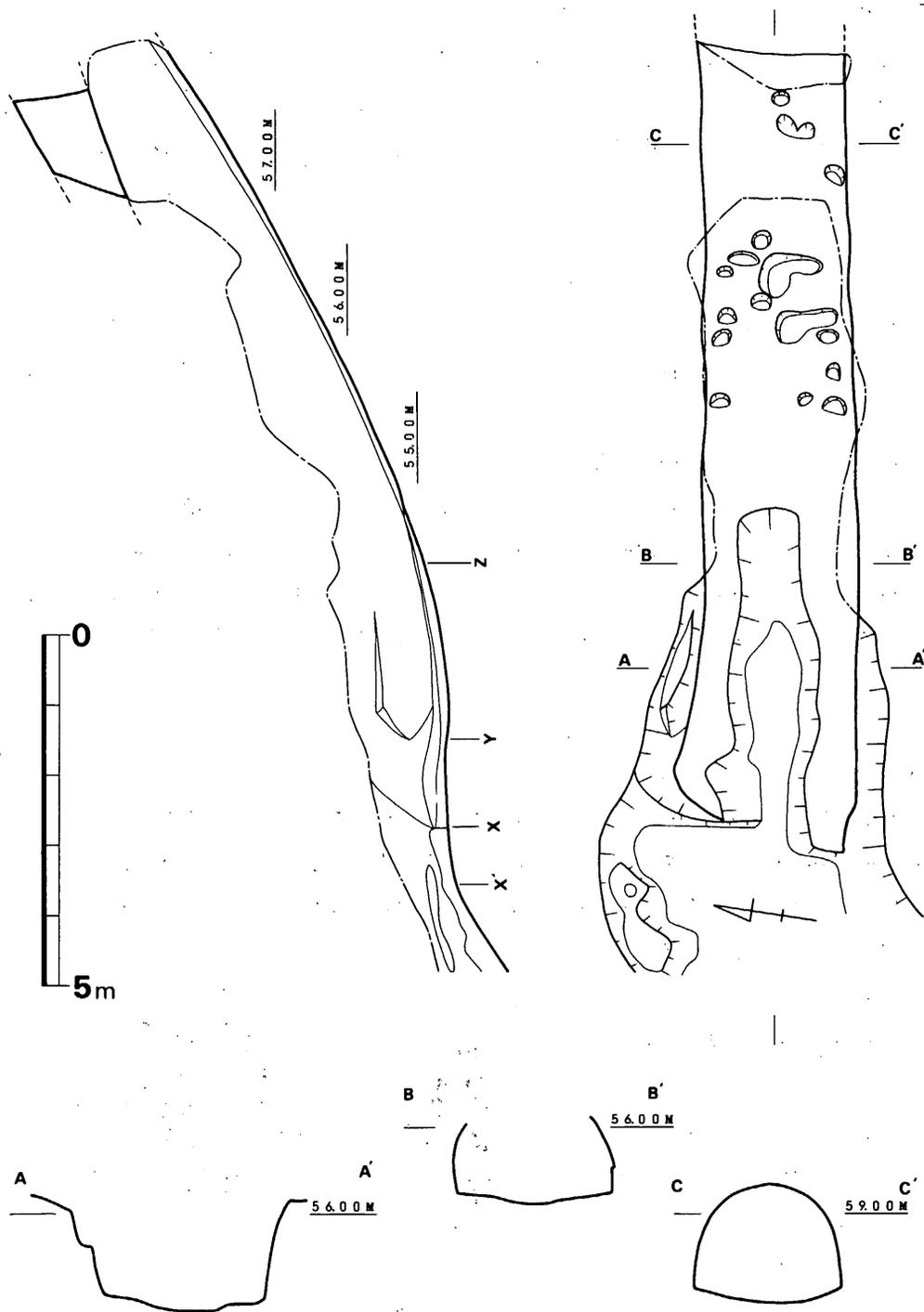
床・壁面ともに良く焼けて固くしまっている。幅はほぼ均一で約2.2mを測る。残存長は7.3m、傾斜角は約30°である。残存部上方で一部天井が残る。その高さは最高で約1.8mである。壁面は熱のためもろくなっている部分がだいぶあり、スサ入り粘土で補修した部分も見られた。床



第2図 平田D-1窯周辺地形図(1/1,000)



第3图 平田D-1 黑地形图 ( $\frac{1}{100}$ )



第4図 平田D-1 窯実測図 (1/100)

には製品を安定させるためと考えられる凹みが検出された。また、最終面には同じく須恵器を安定させるためと考えられる人頭大のスサ入り粘土塊が置いてあった(図版3)。

築造当初の本窯の構造は以上である。本窯はYで約60cm、天井残存部で約20cmの床のかさ上げが観察された。しかし、各床面については、最低5面は数えられるが、それ以上明確に分けることは困難であった。かさ上げされるに従って、灰層が焼成部に近づくことから、焚口が奥へ移動したことがわかる。灰層の観察から焚口は最終的に約25m移動したと思われる。

### 灰原

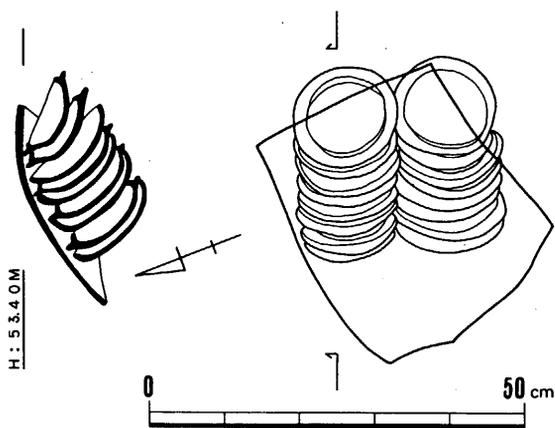
窯跡の下方に扇形に広がる。その幅は14mにも及ぶ。灰原下方の谷が用水路となっているため、土捨て場の関係で一部掘りきれなかった。厚さは約40cm~60cmで比較的浅い。第3図に示したように、2mのグリッドを組んで調査した。その結果、灰原内でも出土須恵器の量に大きな差のあることがわかった。即ち、窯本体主軸より北側では、各グリッドとも整理箱に半分以下、極端な場合はビニール袋1袋という出土量であったのに対して、主軸より南側、特にC-12区では整理箱7箱、C-13区では13箱の出土をみた。失敗品を捨てるに際して、あらかじめ捨て場所を決めていたことを示している。また、窯本体のま下は谷状に凹んでいるが、灰層を掘り上げたところ、その凹み方が極端であるので、自然の小谷に人為的な凹みを加えたものと考えた方がよさそうである。

### 生焼け土器(第5図、図版6・7)

灰原中C-13区で蓋杯のセットが出土した。蓋に身を逆にして入れ込み、2列にそれらを重ね、その上に大甕片をかぶせてあった。表土をユンボで除去中に、ちょうどそのま下を掘り込んでしまい、いくつかのセットが転がり出てしまったのは調査者の不注意であった。従って、原位置を保ったのは8セットと杯身1個の計17個であるが、動いたものを含めると40個20セットあったものと思われる。

灰原中でも最上層に置かれてあった。すべて淡褐色をした焼成不良のものである。すべてに半月形のヘラ記号が付けてある。

当初、焼成不良の須恵器が並べてあったことから、焼成し直すために蓋をかぶせて置いていたのではない



第5図 平田D-1窯生焼け土器出土状態実測図(1/10)

かと考えたが、祭祀の一形態ではないかとする考え方を教示された（註）。前述したように、灰原中でもこの付近にほとんどの須恵器が捨てられたのではないかと考えられるぐらいに多量の遺物が出土した地点であるので、より多く完全な製品ができるようにとの願いをこめた火の神等に対する祭祀が行なわれたとしても肯取できるところである。しかし、類例を待つことにして断定はひかえたいと思う。

註 県文化課岩瀬正信氏のご教示による。

## 2. 遺物

検出した遺物はすべて須恵器で、その量は整理箱85箱分である。蓋杯・高杯・蓋・椀・壺・短頸壺・醜・提瓶・平瓶・甕・把手が出土した。

### 窯内出土須恵器（第6図 1～6）

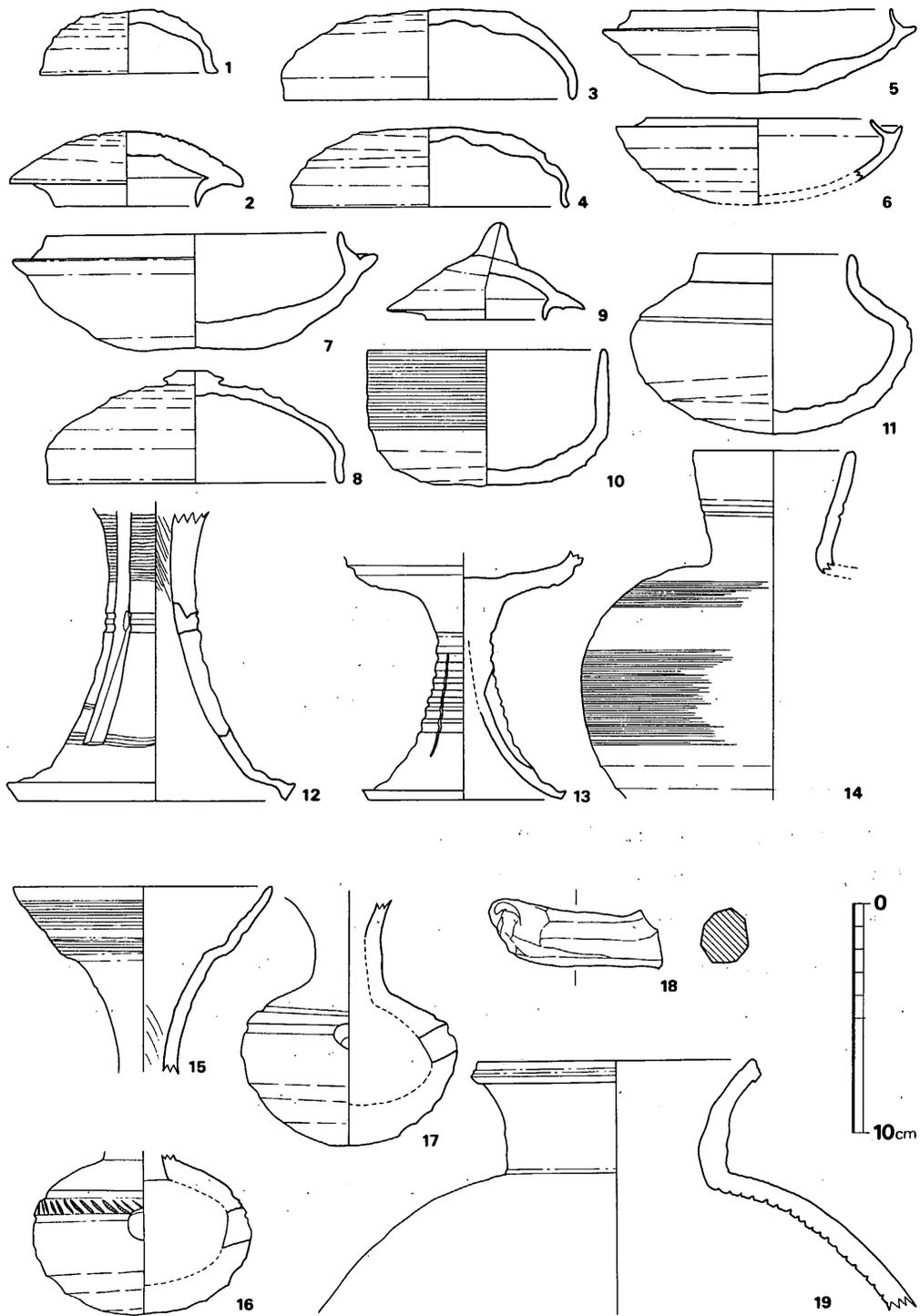
窯中からは遺物出土が少なかった。1・2は天井残存部で第2次床面と考えられる部位で出土したものである（図版7）。二つとも壺の蓋と思われる。3～6は最終床面からの出土である。すべて個々に出土したもので、床面毎の型式差を把むことはできなかった。

### 灰原出土須恵器（第6図 7～19）

本窯跡出土遺物のほとんどは灰原よりの出土である。

杯蓋は天井部をヘラケズリしている。杯身7は受部径15.8cmを測る大ぶりなもので、底部をヘラケズリせず、手持ちのヘラナデを加えているものである。高杯ではやや小型化し、透しのない脚部を持つものに混じって、少数ながら長脚二段透しをもつものがある（12）。13は透しが痕跡的となり、貫通していないものである。（16・17）は孔をあけた際の粘土が内部でそのまま焼け残っており、振るとカラカラと音を出し、有鈴壺と呼ぶにふさわしい。また、18は甕等の把手と思われ、比較的珍しいものである。図版8の8は大甕の蓋ではないかと思わせるような大ぶりなものである。

以上の出土遺物より見て、総じて、本窯跡では付近窯跡出土通有の器形以外にやや異なった土器を含んでいることが目をひく。

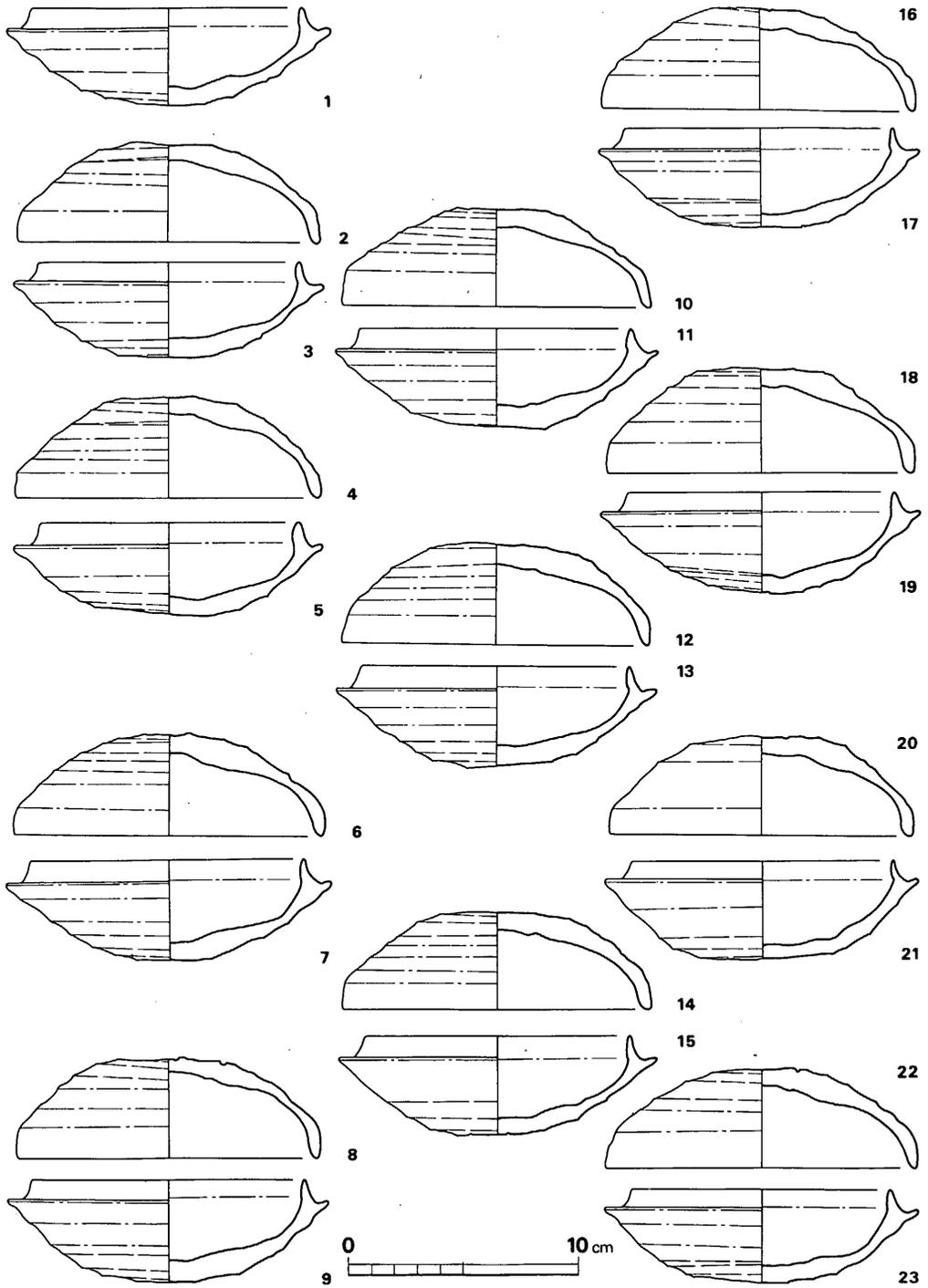


第6図 平田D-1窯出土遺物実測図(1/3)

第 1 表 平田 D - 1 窯出土須恵器観察表

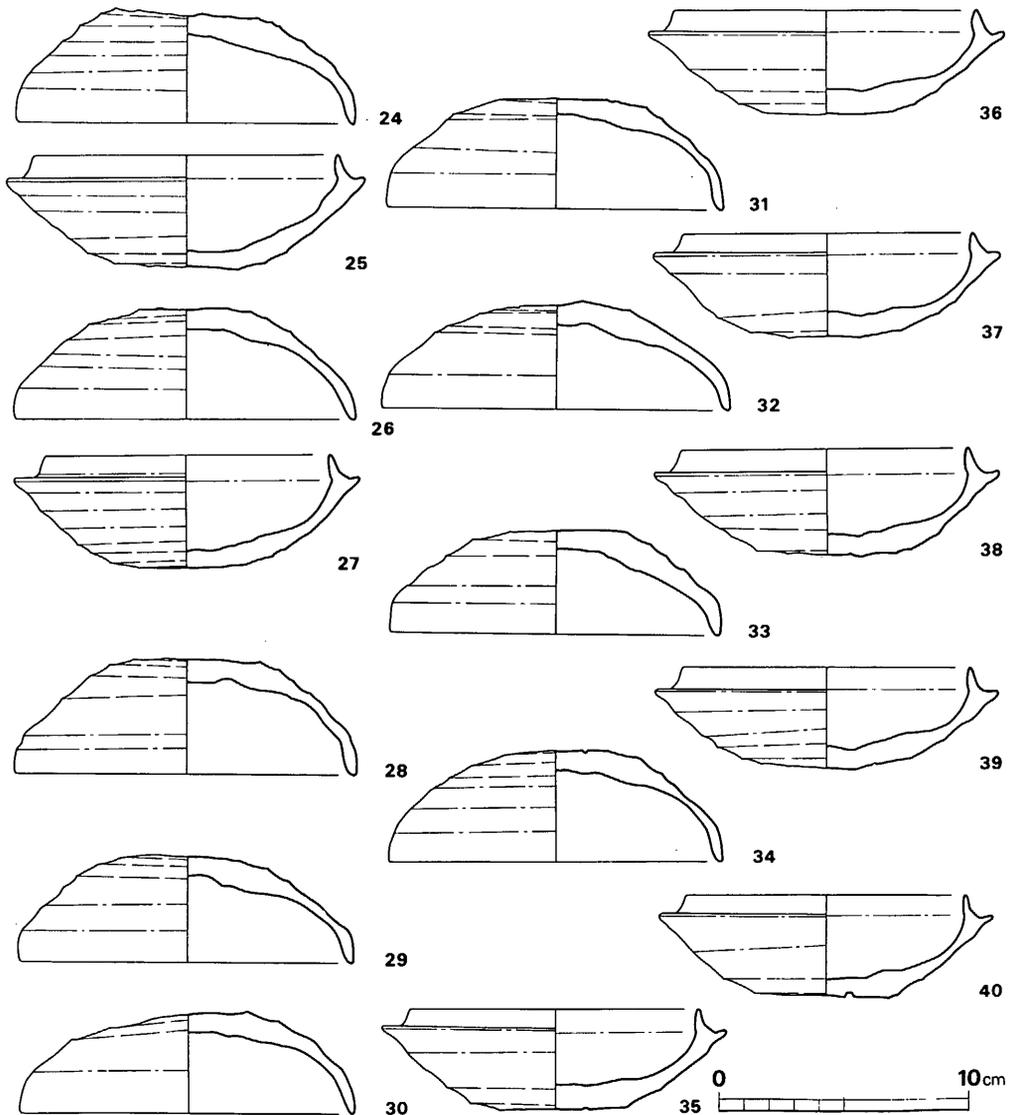
遺物 番号	器 種	図版番号	出土地点	法 量				へら記号	調 整 及 び 特 徴	備 考
				①器高	②口径	③受部径	④底径			
1	蓋	8-1	窯 内	①3.8	②7.8			○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成やや不良、色調 淡灰色	
2	◇	8-2	◇	①3.3	②6.2	③10.1		×	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコ ナデ 胎土砂粒やや含む、焼成やや不良、 色調灰白色	
3	杯 蓋		◇	①3.9	②12.6			○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコ ナデ 胎土砂粒少し含む、焼成良好、色調 暗灰色	やや変形 口縁部一部欠
4	◇		◇	①3.5	②13.0			○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコ ナデ 胎土砂粒含む、焼成良好、色調暗赤 紫色	巻き上げをし ている
5	杯 身		◇	①3.7	②11.3	③13.6		○	底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナ デ 胎土砂粒やや含む、焼成良好、色調 暗灰色	外面灰かぶり
6	◇		◇	①3.8	②9.8	③12.5			底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナ デ 胎土砂粒やや含む、焼成良好、色調 灰色	底 部 欠 灰かぶり
7	◇	8-9	灰 原	①5.1	②12.6	③15.8		×	底部手持ちヘラナデ、内外面ヨコナ デ 胎土きめ細かい、焼成やや不良、色 調淡褐灰色	大ぶりである
8	蓋	8-6	◇	①4.9	②12.8				天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコ ナデ 胎土砂粒含む、焼成良好、色調暗灰 色	3/5欠
9	◇	8-7	◇	①4.2	②5.1	③8.6		×	外面灰かぶりで調整不明 内面ヨコナデ 胎土精良、焼成良 色調灰色	
10	碗	8-12	◇	①5.8	②10.3			○	底部外面ヘラケズリ、外面上部カキ 目、内面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、焼成不良、色調 淡赤褐色	1/4欠
11	短頸壺	9-15	◇	①7.7	②6.8	④12.2			底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナ デ 胎土砂粒含む、焼成良好 色調淡灰色	1/2欠
12	高 杯 脚 部	8-13	◇	⑤11.7					外面上部カキ目、内外面ヨコナデ 内面上部シボリ痕、三面スカシ 胎土砂粒やや含む、焼成良好 色調暗灰色	長脚二段 スカシ
13	◇	9-14	◇	⑤8.3					内外面ヨコナデ、三面スカシ スカシ孔は貫通せず 胎土精良、焼成良好 色調暗灰色	反転復元
14	平 瓶	9-19	◇	②7.0					口頸部ヨコナデ、胴部カキ目 底部回転ヘラケズリ 胎土砂粒やや含む、焼成良好 色調口縁赤紫色、その他灰色	
15	線 口頸部	9-16	◇	①8.0	②11.2				上部外面カキ目、内外面ヨコナデ シボリ痕 胎土砂粒やや多い、焼成良好 色調暗赤紫色	
16	線胴部	9-17	◇	①6.7	④9.4			○	底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナ デ、圧痕紋 胎土精良、焼成良好 色調青灰色	

(9ページにつづく)



第7図 平田D-1窯生焼付土器実測図① (1/3)

遺物 番号	器種	図版番号	出土地点	法 盤				ヘラ記号	調整及び特徴	備考
				①器高	②口径	③受部径	④胴径			
17	鉢	9-18	灰原	①9.4				○	底部回転ヘラケズリ、上部ヨコナデ 胎土精良、焼成良好 色調暗赤紫色	一部灰かぶり
18	把手		ク	全長7.8cm				×	ヘラケズリ、指押し 胎土砂粒含むが精良、焼成良好 色調灰青色	
19	甕	9-20	ク	②12.0					口頸部ヨコナデ、胴部内外面叩き 胎土砂粒やや含む、焼成良好 色調暗灰色	反転復元



第8図 平田D-1窯生焼け土器実測図② (1/3)

生焼け土器（第7～9図）

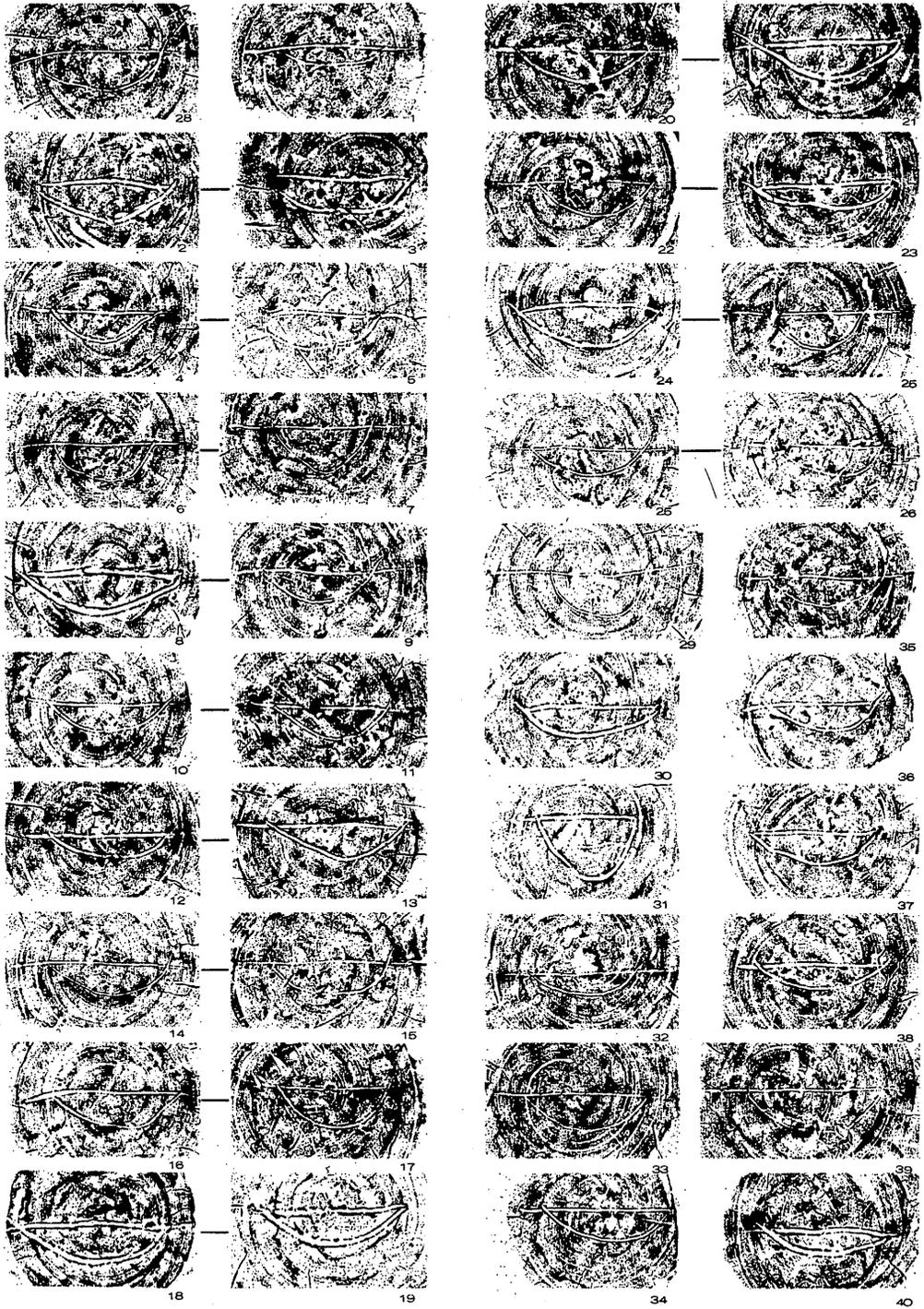
前述したように、灰原C-13区から出土したものである。すべて淡褐色をした焼成不良のものである。技法的に同一で、杯蓋は天井部の  $\frac{1}{2}$ 、杯身は底部  $\frac{1}{2}$  をヘラケズリしており、内面中心部をナデる以外はすべてヨコナデを施している。法量は第2表に示したが、平均すれば杯蓋口径13.3cm、高さ4.3cm、杯身口径11.5cm、受部径13.8cm、高さ4.2cmである。

杯蓋はヘラケズリを施した部分の下で一度凹み、その後やや広がりながら丸い端部で終わる。杯身は立ち上がりが一担傾斜を変えており、丸く細い端部で終わる。内面には立ち上がりの接合部が稜となって残る。立ち上がり高は約1cmである。胎土には砂粒をやや含む。更に杯蓋・杯身それぞれの天井部、底部外面に直線と弧線を組み合わせた半月形を呈するヘラ記号がすべてにつけてある（第9図、図版13～15）（註）。

註 第7・8図と第9図、図版13～15の番号は統一してある。1～17までは原位置を保ったもの、その他は原位置を動いたものだが、18～27はセット関係のわかるものである。

第2表 平田D-1窯生焼け土器計測表

杯蓋			杯身			
No	口径	器高	No	口径	受部径	器高
			1	11.8	14.1	4.3
2	13.2	4.4	3	11.4	13.5	4.1
4	13.2	4.4	5	11.4	13.4	4.1
6	13.4	4.4	7	11.9	14.1	4.4
8	12.9	4.3	9	11.7	14.0	4.5
10	13.4	4.2	11	11.6	14.0	4.3
12	13.3	4.3	13	11.5	13.9	4.4
14	13.3	4.3	15	11.4	13.8	4.3
16	13.6	4.5	17	11.6	13.9	4.3
18	13.2	4.5	19	11.5	13.9	4.3
20	12.9	4.3	21	11.3	13.6	4.2
22	13.4	4.4	23	11.1	13.5	4.1
24	13.6	4.5	25	11.9	14.2	4.5
26	13.6	4.4	27	11.7	13.7	4.5
28	13.5	3.6	35	11.4	13.7	4.1
29	(13.2)	4.3	36	11.9	14.2	4.1
30	13.2	4.1	37	11.5	13.8	4.1
31	13.2	4.4	38	11.4	13.7	4.2
32	(13.8)	4.3	39	11.4	13.6	4.0
33	(13.0)	4.1	40	11.0	13.3	4.1
34	13.3	4.4				
平均	13.3	4.3		11.5	13.8	4.2



第9図 平田D-1 窯生焼け土器ヘラ記号拓影(1/3)

## Ⅳ ま と め

牛頸平田地区の窯跡については、かつて調査報告されたことがある(註1)。D地点としたのは、調査されたA・B地点の窯跡の西北西約500mに位置する窯跡である。かつては二基あったらしいが(註2)、調査する段階では一基しかなかった。調査したD-1窯についてまとめれば以下の通りである。

1. 遺跡は牛頸古窯跡群の中央部に位置する。
2. 小支谷に面する西斜面に築かれている。
3. 平田D-1窯はN-82°-Eの主軸を持つ地下式窯で、残存長約12m、築造時床面の焼成部傾斜角は約30°である。床面は5枚以上である。
4. 灰原は幅14mにも及ぶが、土器の捨て場は決まっていたらしい。また、前庭部下方は人為的に凹みを深くしているらしい。
5. 灰原中に焼成不良でヘラ記号が同じ杯蓋のセットが並べてあった。
6. 出土遺物から見て、本窯の年代はⅢB~Ⅳ期のもと考えられる。

次に、灰原中から出土した焼成不良の杯蓋セットについての観察結果を述べてみたい。

まず、ロクロの回転方向については、杯蓋を伏せて砂粒の動きを見ると、ヨコナデ部分は時計回りに、ヘラケズリ部分は反時計回りに動いているのがわかる。杯蓋は成形時は天井部を下にして、ヘラケズリ時は伏せてロクロを回転させたと考えられるから、砂の動きよりロクロは時計回りに回転していたことがわかる。砂の動きは40個すべて同じなので、この40個については、すべて時計回りのロクロで作られたことがわかる。

次にこれらの杯蓋につけられた半月形のヘラ記号から、製作者の数について考えてみたい。

半月形を構成する直線と孤線を見ると、切りあっている場合はすべて直線が先にひかれたことを示している。また、直線・孤線の両端を見ると、太い方と細い方がある。常識的に太い方からひき始め、細い方にひき流したようである。また、線の断面を観察すると、先の丸い「ヘラ」で施したもの(図版14の17等)と、断面が三角形になるような「ヘラ」で施したもの(図版13の4等)の二種類あることがわかる。後者の断面を観察すると、孤線の中央付近は直線側に急で、反対側に緩やかになっている。今、土器面を水平と考えた場合、製作者がヘラ記号を施す時に「ヘラ」と土器面のなす角度は、我々が鉛筆を持つ場合と同様に、手前が鋭角になるはずである。この場合、つけられたヘラ記号の断面は手前が緩やかになり、反対側が急になる。即ち、前述のような断面が形成されるには、製作者から見て直線が上、孤線が下(手前)にくるようにしてひかれなければならない(註3)。

以上の結果をふまえて、40個の須恵器を直線が上、孤線が下にくるように置いてみると、先

端の細い方が右にくる場合と左にくる場合が見られる。これはそのまま前者が右ききの人によって、後者が左ききの人によってひかれたことを示すものと思われる。左ききの人によってひかれたと思われるものは2・3・5・8・18・19・21・23・24の10個で、残り30個は右ききの人によってひかれたと思われる。割合にすれば右きき75%、左きき25%である。

ヘラ記号を施した工人の数を考える際、きき腕の違いは第1の鍵となることはわかったが、第2に線の断面から見た「ヘラ」の種類、第3にひき方のくせが見分けられるかということになろう。これらはそれほど容易な作業ではない。特に第2については、「ヘラ」を製作者が変えることもあろうし、あるいはそれが木製などであった場合、先端を削り直すこともあったろう。従ってかなり主観的ではあるが以下のように分けてみた。

まず、左ききの場合を見ると、直線がやや上ぶくらみになるものと比較的整っているものがある。

前者は 2・3・24……………①

後者は 8・18・19・21・23・40……………②

であり、5はその他となる……………③

右ききの場合

孤線が極端に下にふくらむもの 7・29・31……………④

直線と孤線の出発点が離れているもの 28・1……………⑤

比較的整った形をしているもので線の細いもの 4・6・9・10~17・22・25~27・33・34・36・39…⑥

同じく線の太いもの 20・30・32・35・37・38……………⑦

以上であるが、このうち①と②は同じになるかもしれないし、また、⑥・⑦は更に分けられるかもしれない。しかし、より客観性を持つためには、観察者を多くして最大公約数的な数値を出す必要がある。しかし、この40のヘラ記号は決して一人によってつけられたものでないことは認められるであろう。

また、ヘラ記号をつけるのは須恵器の製作者か、あるいは別に担当者がいたのかという問題については必ずしも断定できないが、40個のうちにもかなりバラエティがあるところを見ると、製作者がつけたと見る方が合理的のようである。

さて、ここでもう一度ロクロの問題に帰りたい。即ち、40個の蓋杯を作ったロクロの回転方向が同一であることと、ヘラ記号をつけた工人には右きき、左ききがいたことから、ロクロの回転は製作者のきき腕とは関係のないことがわかる(註4)。従って、ロクロは手網等をひく補助者を必要とするものか(註5)、蹴ロクロ(註6)のようなものが想定できよう。

以上をまとめると

1. 一つのヘラ記号は複数の工人が共有するものであること(註7)。
2. ヘラ記号は須恵器製作者本人がつけたのではないかということ(註8)。

3. ロクロは補助者を必要とするようなものか、蹴ロクロのようなものが想定できること。  
である。しかし、この一群の蓋杯が前述したように祭祀的な意味あいを持つものであった場合には特殊な例なのではないかという疑いがある。

ヘラ記号は工人集団を考える際の鍵となりそうながら、依然として隔靴搔痒の感がある。しかし、時間的制約があるとは言え、まだ蓋杯にヘラ記号のつけられている割合も判明していない現状を考えれば、基本的な作業、データの蓄積をはからなければならないことが痛感される(註9)。

註1. 坂詰秀一編『筑前平田窯跡』雄山閣 1974

註2. 『大野城市遺跡分布図』福岡県教育委員会文化課 1973

註3. この置き方を90°回転した場合、即ち、直線を水平ではなく手前にひきおろすように置いても前述の断面は形成される。この場合は右きき、左ききの想定が全く逆になる。しかし、ヘラ記号を施した工人数を考える場合には影響がない。

註4. 田辺昭三他『陶色古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966 P40~42。陶色では初めロクロを逆まわりに回転させ、やがて順まわり(時計まわり)に固定していったが、それは構造的な変化と考えられている。

註5. 小林行雄『古代の技術』塩書房 1962 P39~40。

註6. 註3文献P40

註7. 小田富士雄他『塚ノ谷窯跡群』八女市教育委員会 1969 では同一のヘラ記号を持つものは同一工人のものと考えられている。山崎純男他『広石古墳群』福岡市教育委員会 1977 では同一のヘラ記号を有するものも、記号の形状・手法が異なり、それは工人差を示すと考えられている。中村浩氏らによればヘラ記号は他の工人との混乱をさけるための記号であるとされ、ヘラ記号は個人のものと考えられているようだ。中村浩『須恵器』ニューサイエンス社 1980

註8. 理論的には、工人あるいは工人集団の「統括者」がつけた事も考えておかねばならないだろう。

註9. この項を書くにあたって、県文化課主任技師酒井仁夫氏にご教示を得た。感謝の意を表したい。

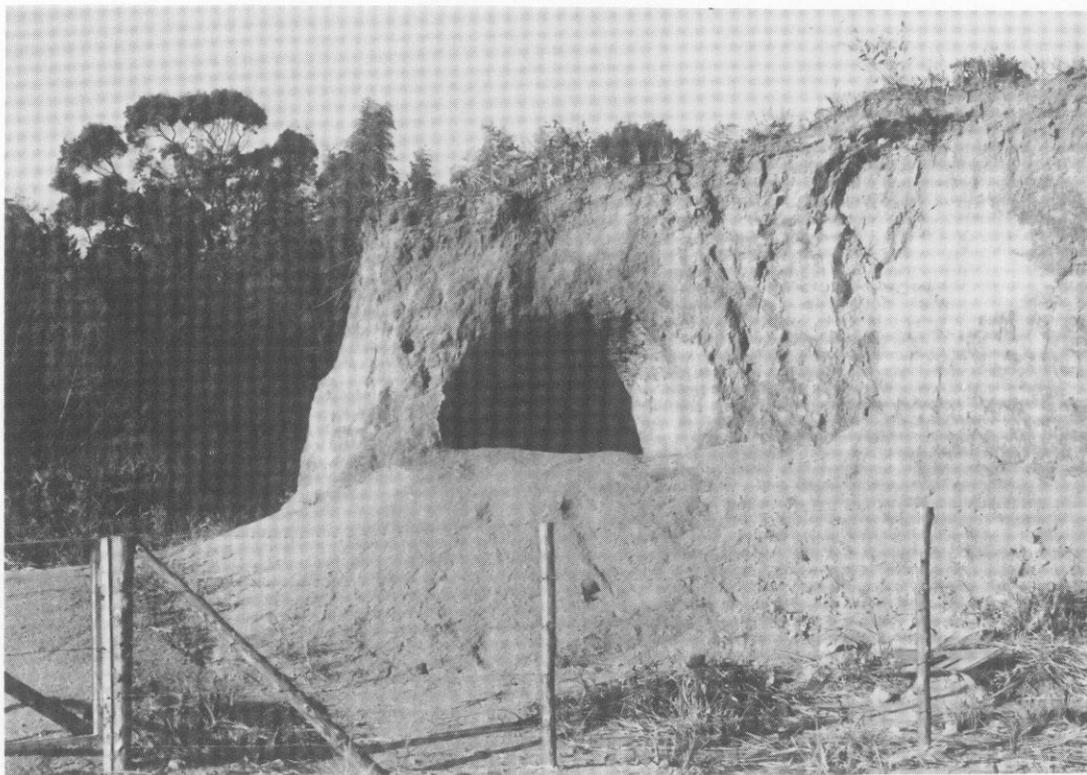
#### 調査協力者(アイウエオ順)

川辺富美子・久間佐知子・境澄子・柴高実・柴高政子・白水富江・高山和恵・田中アイコ・田中金太郎・田中フミ子・永野文子・中山定雄・中山さつき・樋口紀子・松本富子・八藤丸マサエ・八尋妙子・山上ヒロ子

井手美知子・大谷龍代・小野淑恵・野田節子・松本利子・牟田昌子

長沼梅乃・吉村妙子

# 版 圖



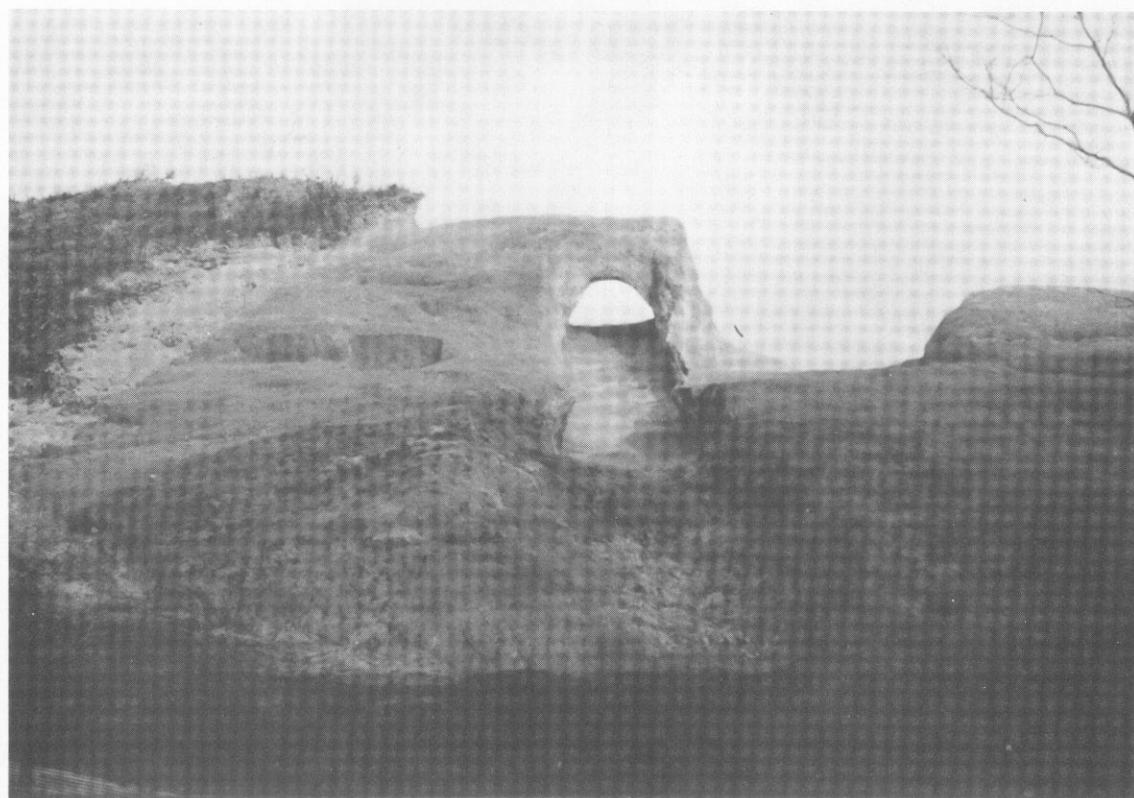
(1) 平田D - 1 窯調査前



(2) 平田D - 1 窯調査後 (気球写真)



(1) 平田D - 1 窯最終床面と灰原



(2) 平田D - 1 窯全景



(1) 平田D-1 窯最終床面



(2) 平田D-1 窯最終床面



(1) 平田D-1 窯床面断面



(2) 平田D-1 窯灰原

(1) 平田D-1  
窯全景

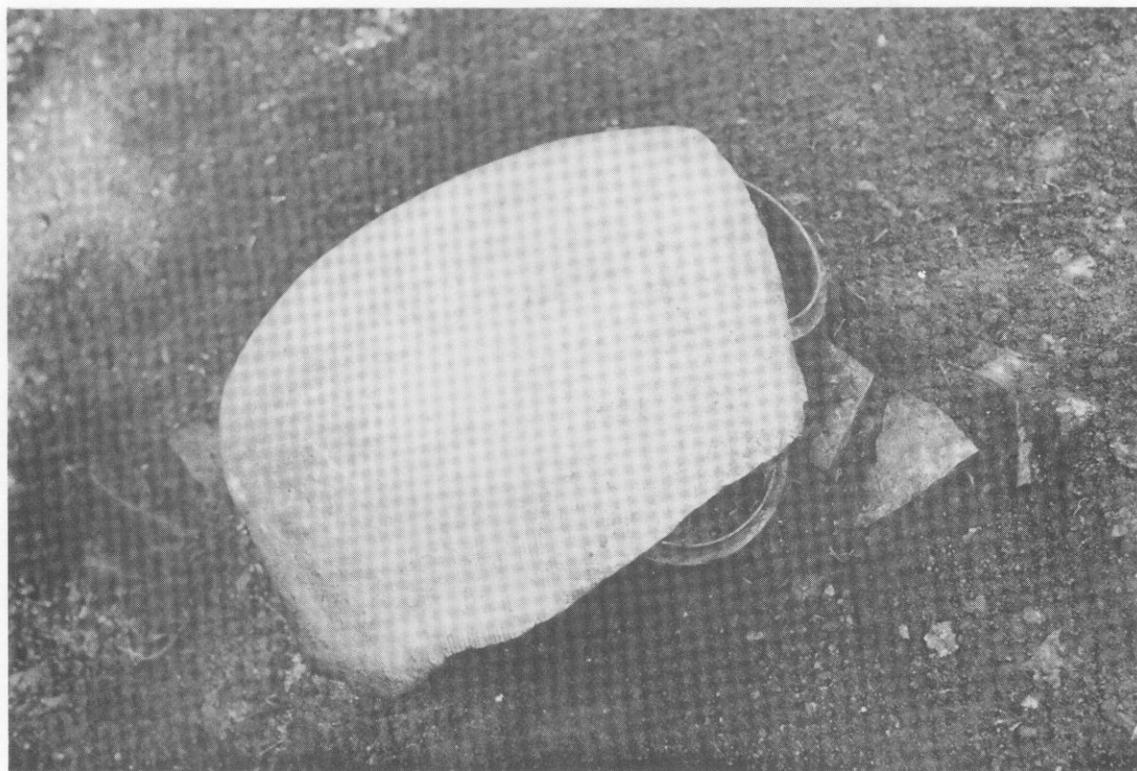


(2) 平田D-1  
窯全景



(3) 平田D-1窯  
(上方より)





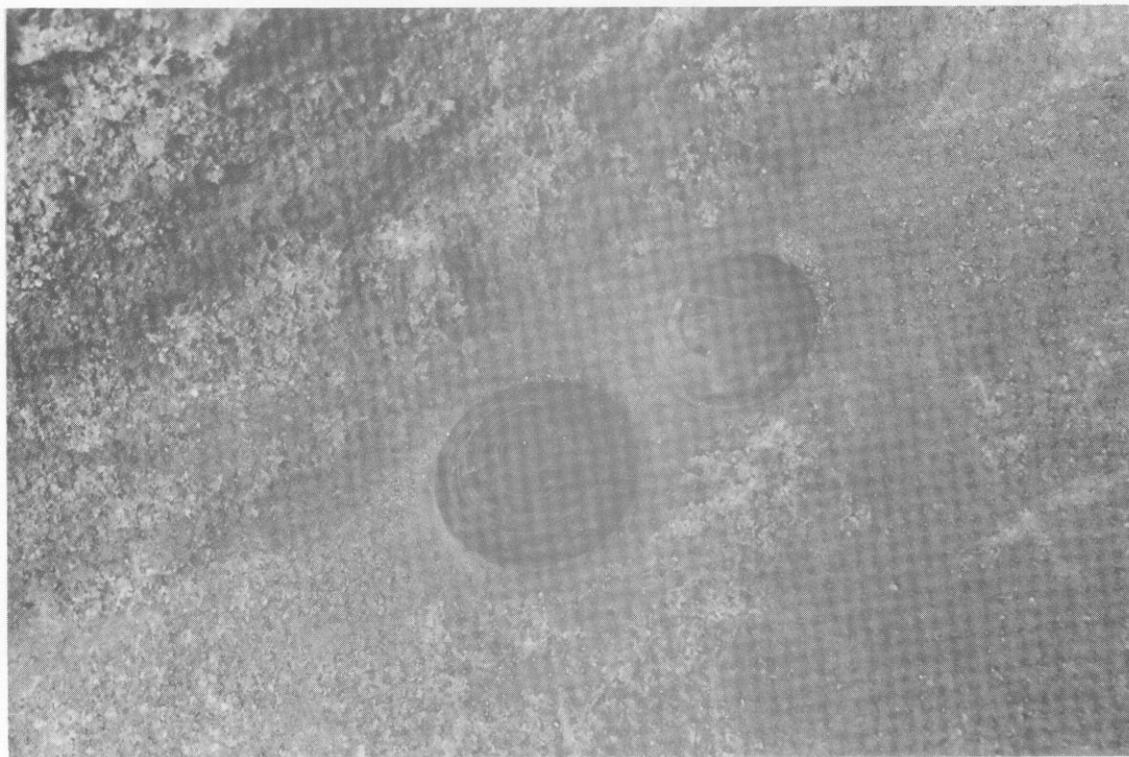
(1) 平田D - 1 窯生焼け土器出土状態



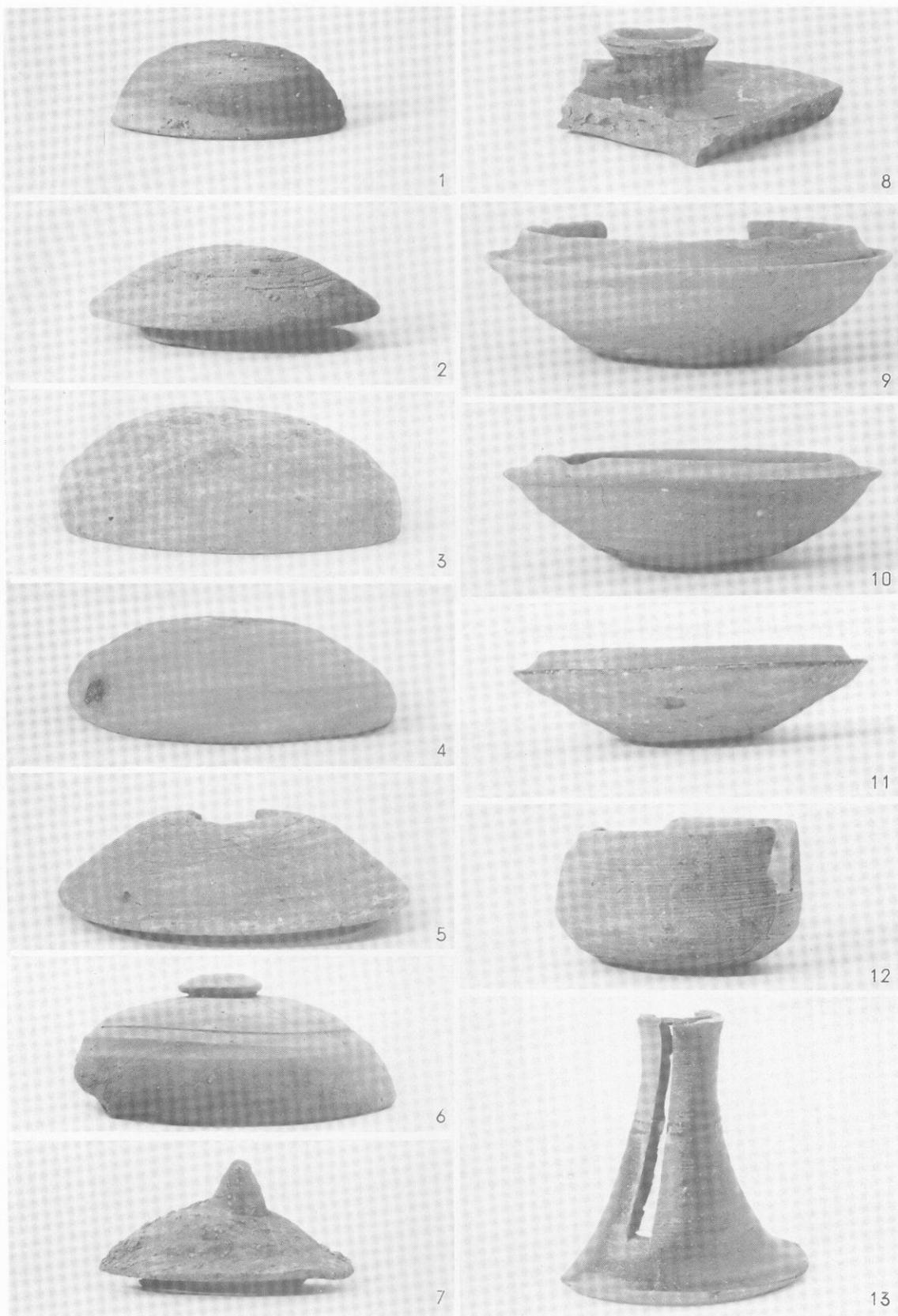
(2) 平田D - 1 窯生焼け土器出土状態 (蓋除去後)



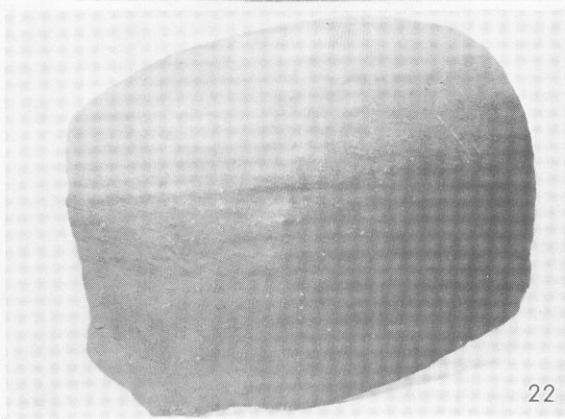
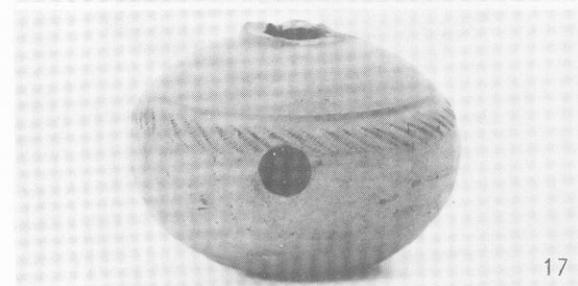
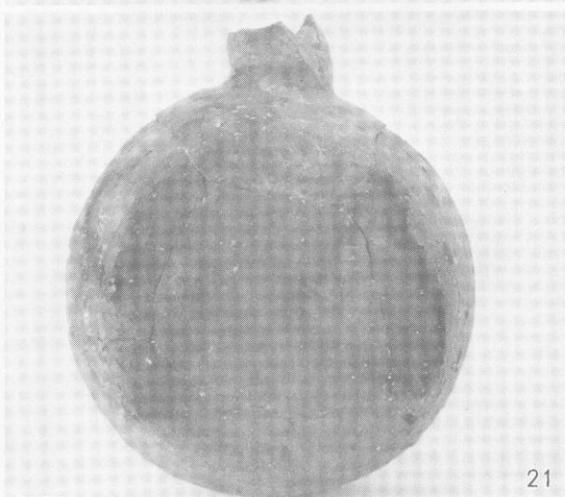
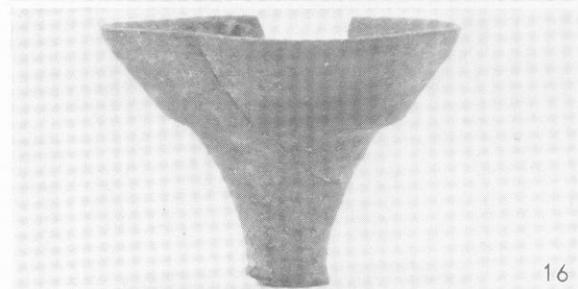
(1) 平田D - 1 窯生焼け土器出土状態

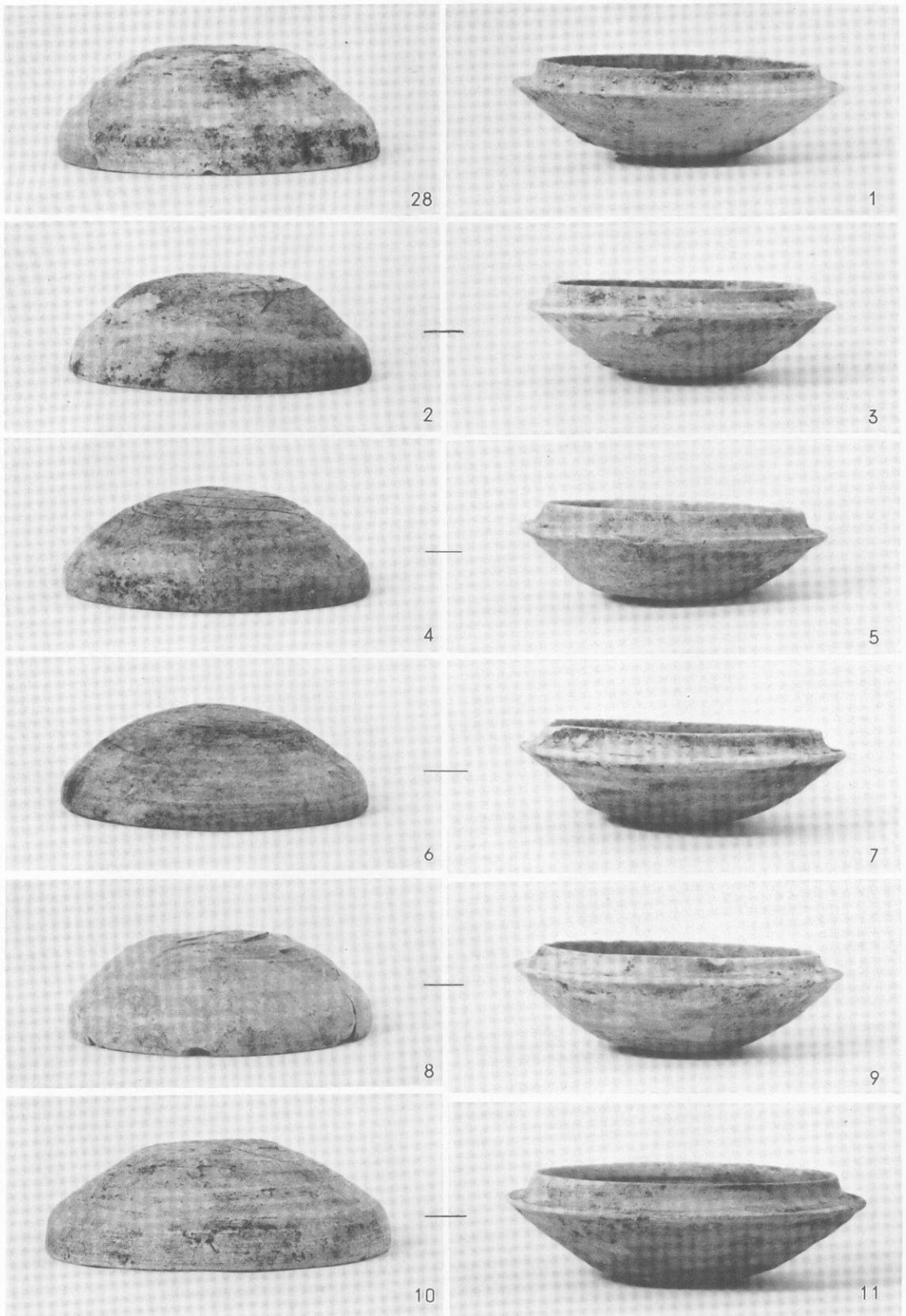


(2) 平田D - 1 窯々内土器出土状態

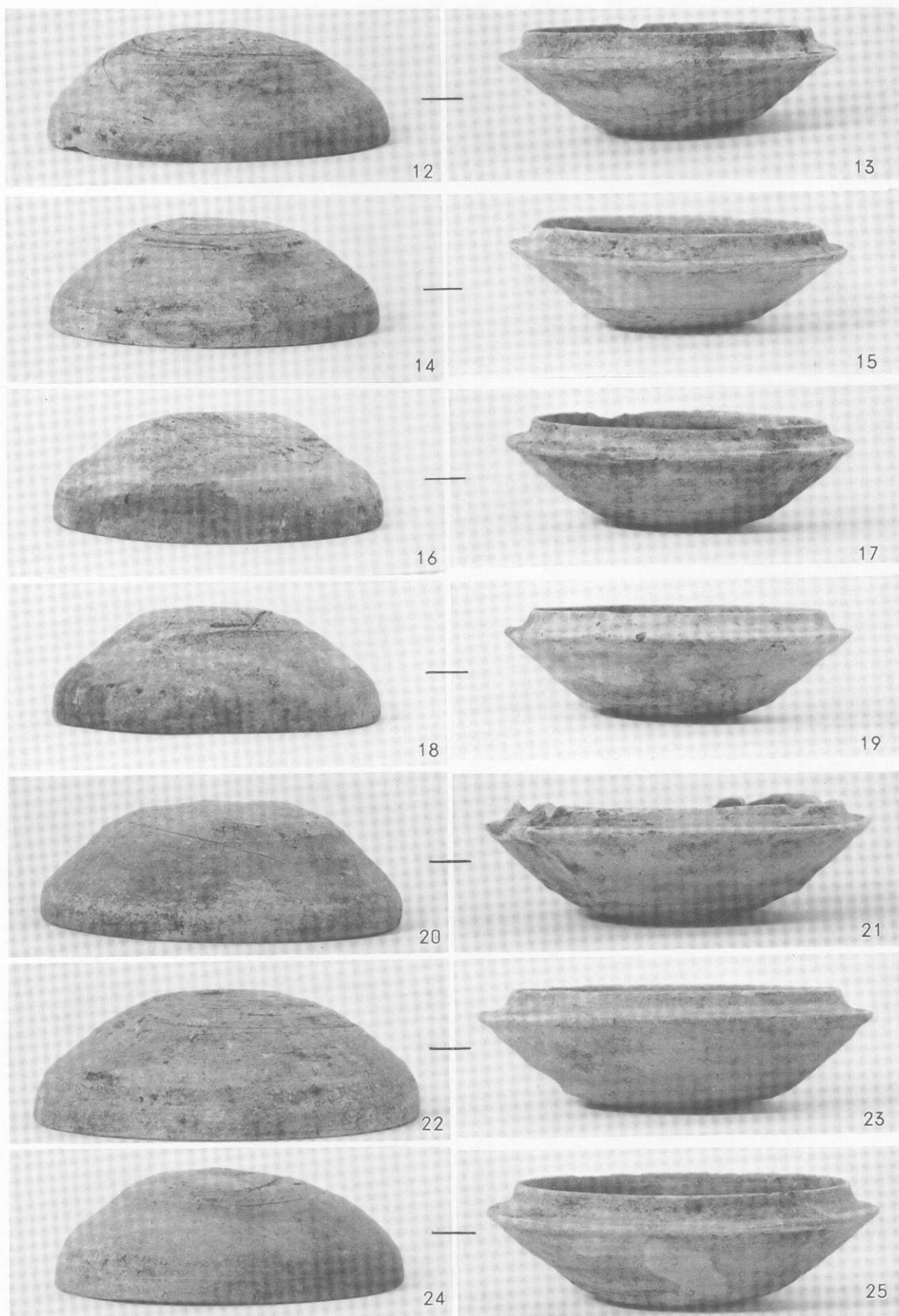


平田 D - 1 窯出土遺物 ①

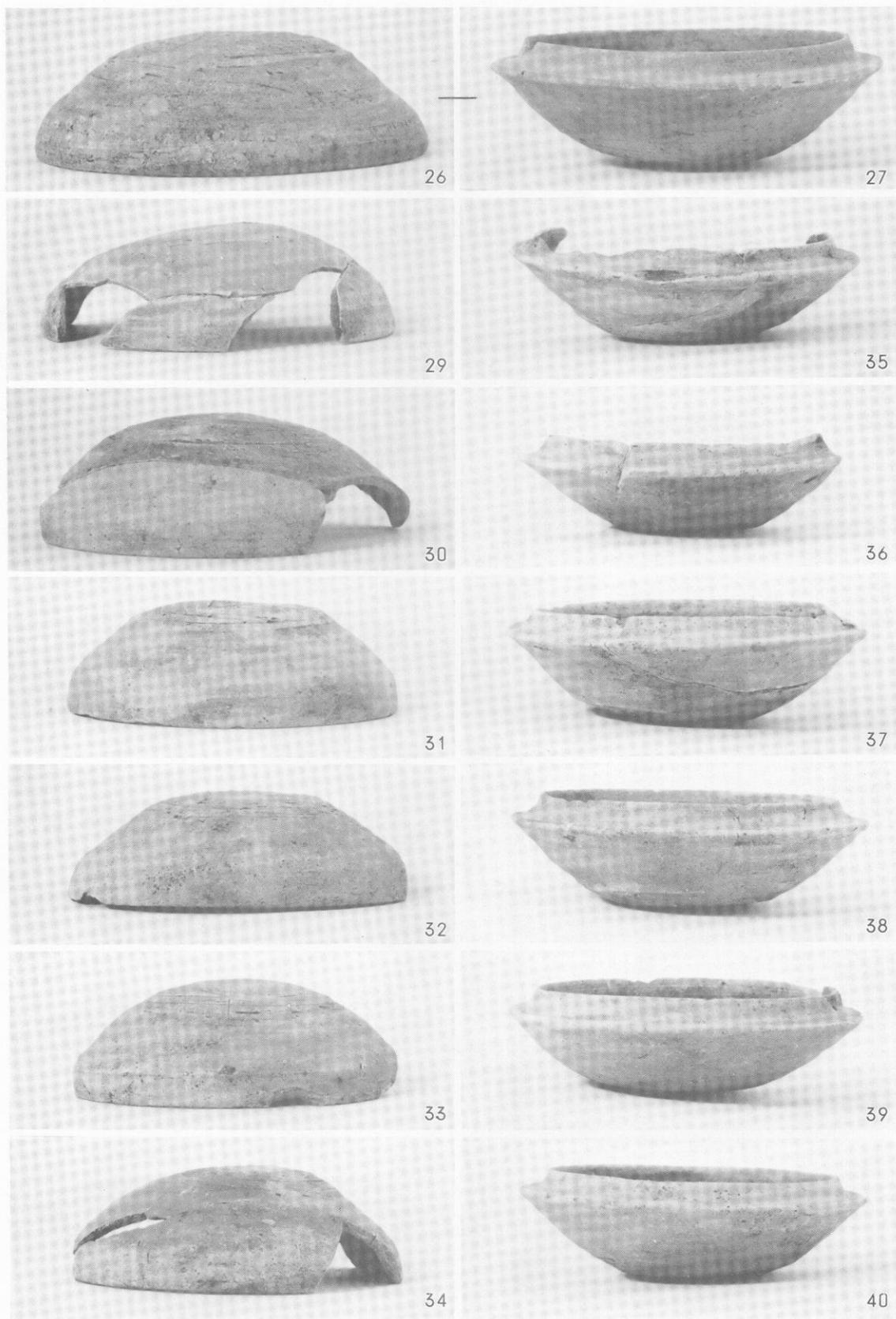




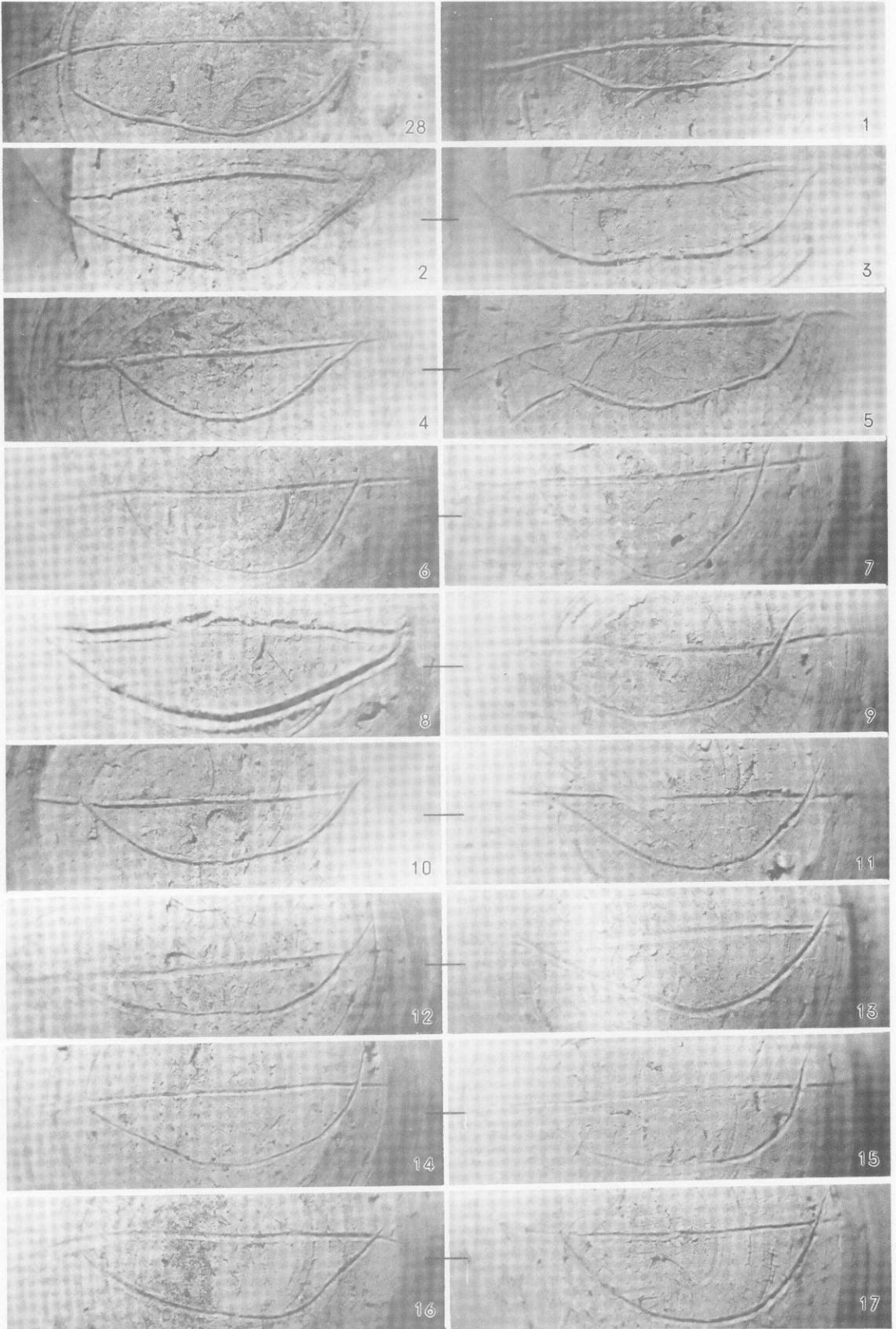
平田D-1 窯生焼酎土器①



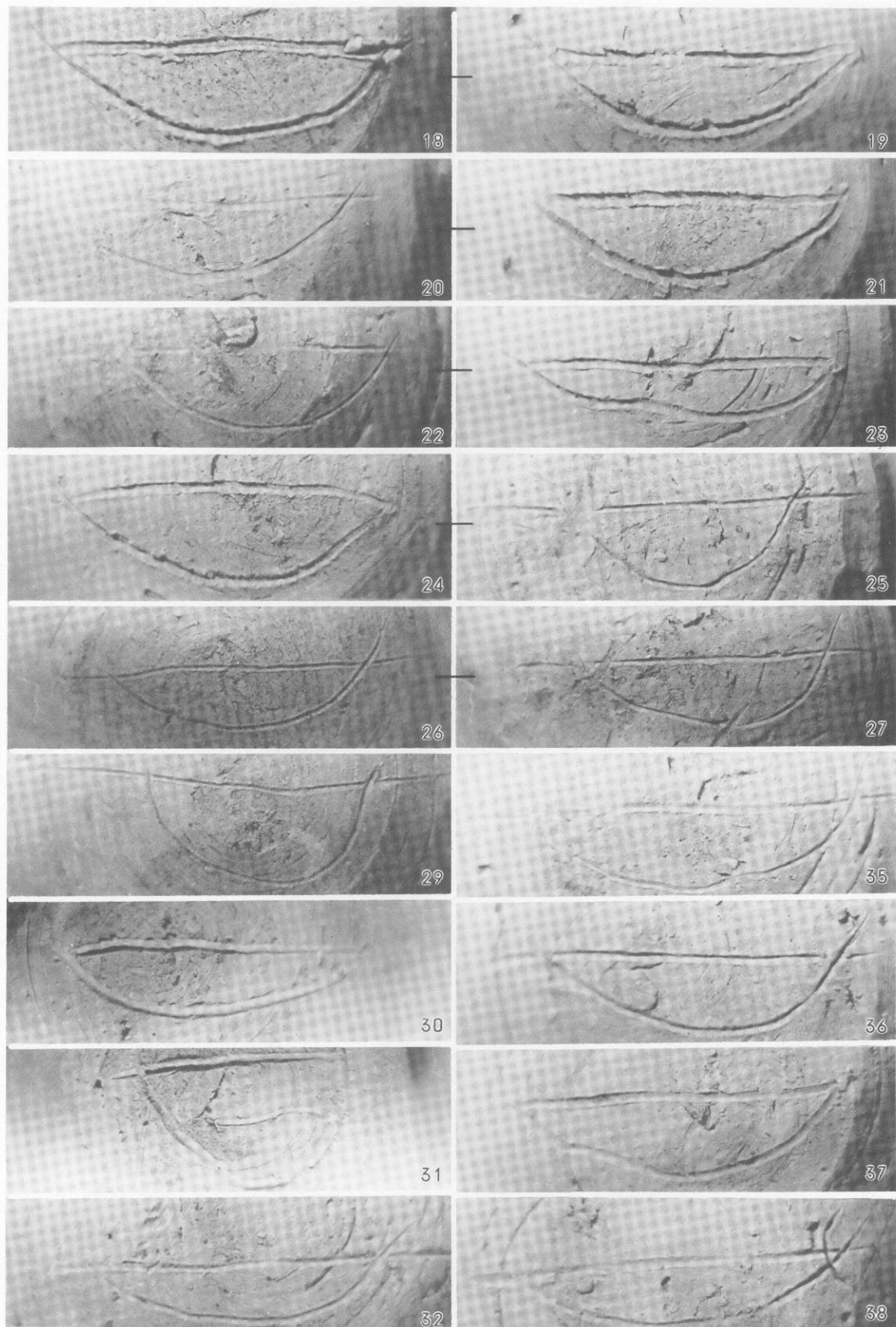
平田 D - 1 窯生焼付土器②



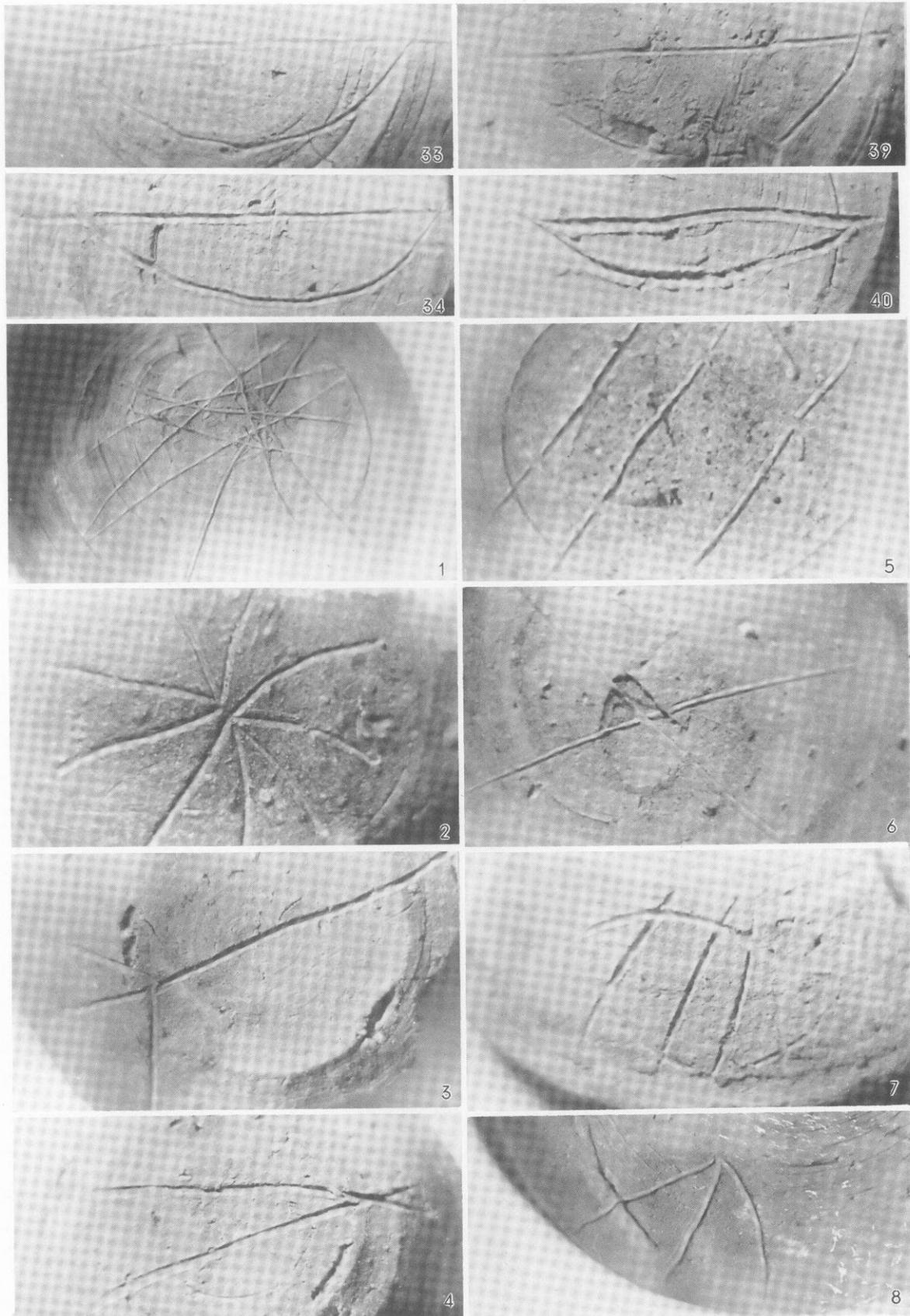
平田 D - 1 窯生焼け土器 ③



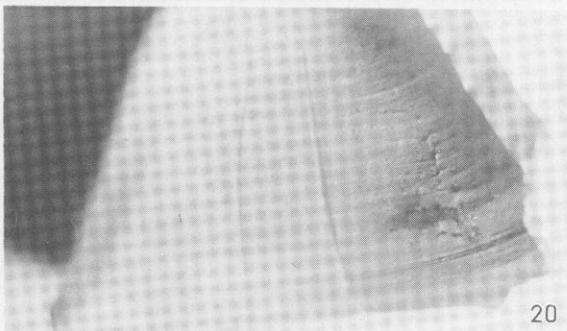
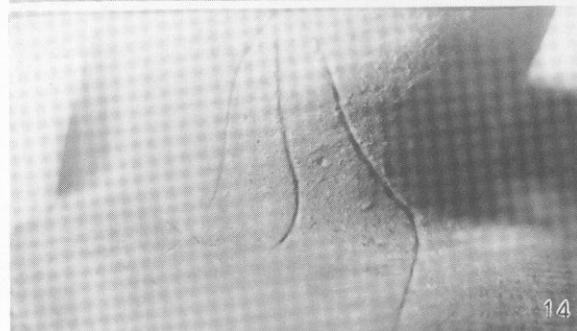
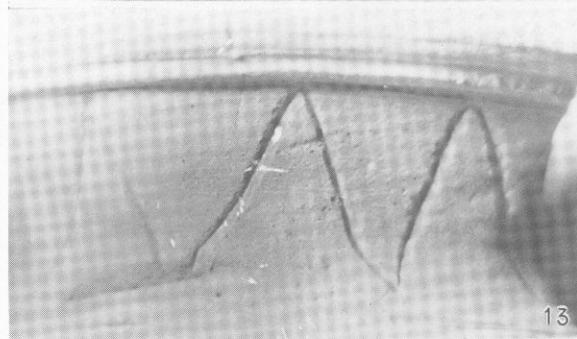
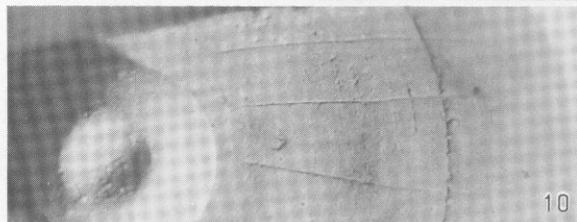
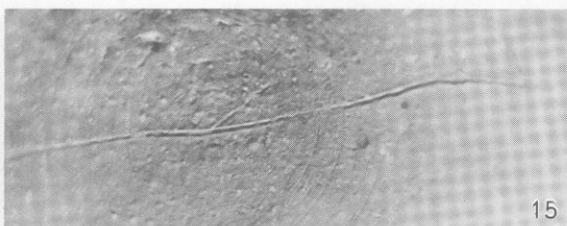
平田D - 1 窯生焼け土器ヘラ記号①



平田D - 1 窯生焼け土器ヘラ記号②



平田D-1窯生焼け土器ヘラ記号③(33・34・39・40)、平田D-1窯出土須恵器ヘラ記号①



# 大野城市文化財調査報告書

## 第 5 集

昭和55年3月31日

発行 大野城市教育委員会  
福岡県大野城市曙町2丁目17番地

印刷 江栄印刷有限会社  
福岡県筑紫郡太宰府町1088